

2022 年度第 4 回研究会（通算第 9 回）

開催日時：11 月 27 日（日）：13 時 30 分～17 時 50 分

場所：オンライン会議室

共催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」，東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」

「言語変化・変異と言語獲得」というテーマのもとで、4 名のメンバーが、それぞれの分野内の話題を 30 分で提供し、15 分の質疑応答をしたあと、内容について、5 名のディスカッサントおよび他の参加者の間で、60 分程、質疑応答や意見交換を行った。

講師 1：佐藤陽介 (Yosuke Sato) (津田塾大学)

「入力不確定性と統語的脆弱性:他動詞型主語制御 *Promise* に関する話者間の変動」
(Input Indeterminacy and Syntactic Vulnerability: Interspeaker Variation in Transitive Subject Control *Promise*)

本発表では、*Kris promised Mary to leave the party.*のような他動詞型主語制御用法の *promise* 構文についての英語話者間の容認性の揺れ (Courtenay 1997; Takami 1998; Nakajima 1998; Nishihara 1999, 2000 など) が生じるのはなぜかを考察した。より具体的には、上記の構文の着点表現が、①PP に含まれる文法と、②内在格を持つ DP を中心とした K(ase)P に含まれる文法、この二つが英語話者には存在し、この違いが Minimal Distance Principle との相互作用により、上記の容認性の判断を生むとする提案を行った。この分析では、一見名詞的に見える表現が KP であつたり PP であつたりする場合があるということになるが、この提案の独立の証拠として、日本語の「に」格 (Sadakane and Koizumi 1995)、統語的に能格型の言語として PP 言語と DP 言語があること (Polinsky 2016)、そして経験者を目的語とする構文でもその文の意図性に応じて当該項が PP であつた DP であつたりするという事実を挙げた。本発表の結果は、普遍文法で規定された仮説空間において可能な形式として第一次言語資料と矛盾しない文法が複数存在する場合、言語学習者どの文法を獲得することも可能であるという仮説(Han et al. 2007, 2016; Sato 2022)を支持するものである。

講師2：青柳宏 (Hiroshi Aoyagi) (南山大学)

「V1-テ V2 動詞連鎖構造におけるテに関する管見」

(Remarks on *-te* in V1-*te* V2 serial verb constructions)

本発表では、前項(V1)に動詞テ形を要求する動詞連鎖構造を論じた。日本語の動詞連鎖には、後項(V2)が V1 に、(i)接辞型助動詞のサセ、ラレのように動詞語幹を要求するもの、(ii)語彙的複合動詞 (例：押し倒す) や統語的複合動詞 (例：押し始める) のように動詞連用形を要求するもの (影山 1993) に加えて、(iii)「置いておく」のようにテ形を要求するものがある。

はじめに、問題の出発点として、日韓語の文法化の比較研究に基づく提案、つまり、除外型受動でもっぱら被害を表すラレと受益補助動詞のモラウ (いずれも韓国語には存在しない) が Voice より高い位置に現れる適用形(High(er) Applicative)だとの主張 (Aoyagi 2010) を概観した。この分析の下では、V1 に (i)動詞語幹を選択するラレと (iii)テ形を選択するモラウが系列的(paradigmatic)関係にあることになる。

まず、岸本(2015, 2021)の提案する「～する／したのは ... ことだ」という疑似分裂文を用いたテストは、発表者が従来から主張してきた階層的 vP 構造の妥当性を支持する。これを除外型受動のラレ文、受益のモラウ文に適用すると、「太郎がされたのは、花子に泣かれることだ」、「太郎がしたのは、花子に働いてもらうことだ」が派生し、当該のラレやモラウが T 以下の vP の階層にあることを示した。

つぎに、テは、通時的には古語の完了の助動詞ツに由来するが、共時的には時制辞(T)やアスペクト(Asp)とする見解(Nakatani 2013, 岸本 2021, Aoyagi 1998, 青柳 2006)と動詞テ形を活用の一形態とする見方(近藤 2018, 青柳 2022)がある。Nakatani (2013)によれば、前者の最も強力な証拠はテ形が過去のタ形と同様の音韻現象 (例：イ音便、書いて/書いた) を示すことにあるが、タが古語の完了のタリに由来し、さらにタリがテアリの縮約形である事実を鑑みれば、Nakatani の観察は単にテにまつわる音韻現象をみているに過ぎないともいえる。一方、近藤(2018)は現代語で V1 にテ形を要求する V2 にも連用形を取るものがあつた (例：据え付けあり (据え付けてある) , 染めおく (染めておく)) 事実などを根拠に動詞テ形は活用的一种だと主張している。

また、V1にテ形を取る動詞連鎖には、「(損な役回りを)買って出る」「(総裁選に)打って出る」「(悪い噂が)ついて回る」「(態度が)取ってつける」「(助言を)切って捨てる」のように前項、後項ともに動詞連鎖全体の意味にどのように寄与しているか不透明なものが相当数存在するが、これらのV2が統語的に前項位置にTPやAspPを埋め込んでいるとは到底思えない。

最後に、分散形態論(Distributed Morphology)の立場で上記の事実を説明するために、(I)V1にテ形を取る方向性やアスペクトを担うV2(例:テ・ユク, テ・オク)は接辞 $-te$ とともに機能範疇主要部に基底生成し、PFで $-te$ が下降し最寄りの動詞に付加する(Embick & Noyer 2004), (II)V1にテ形を取る意味的に不透明な動詞連鎖(例:買って出る)は、 v によって範疇化される前に前項の語根 $\sqrt{R1}$ に $-te$ が付加するという分析を提案した。

講師3: 岸本秀樹 (Hideki Kishimoto) (神戸大学)

日本語の二次述語:描写述語と結果述語の構造

(Secondary Predicates in Japanese: The Structure of Depictive and Resultative Predicates)

本発表では、日本語の2種類の二次述語(描写述語・結果述語)の構造について、述語内に発音されない主語があることをいくつかのデータを用いて論じた。特に、結果述語については、英語を含むゲルマン語と日本語の構造が異なることを示して、その違いが二次叙述の依拠する意味構造の違いによることを提案した。

講師4: 杉崎鉦司 (Koji Sugisaki) 関西学院大学

英語における部分構造制約の獲得: 予備的研究

(Partitive Constraint in Child English: A Preliminary Study)

英語の部分構造(partitive construction)は、Jackendoff(1977)などで提案されている「部分構造制約」にしたがうことが知られている。この制約は、quantifier+ of+ NP という形式を持つ部分構造において、埋め込まれているNPが「定」(definite)でなければならないことを定めるものである。Sauerland & Yatsushiro (2017)の観察によると、この意味的な制約は英語のみではなく日本語の部分構

造にも当てはまることから、すべての言語が満たすべき属性を定めた「普遍文法」(UG)の反映である可能性が高い。もしそうであるならば、英語を獲得中の幼児は観察しうる最初期からこの制約にしたがうことが予測される。本研究では、CHILDE データベース(MacWhinney 2000)に含まれる英語を母語とする幼児 8 名の自然発話を分析することにより、この予測の妥当性を検討した。分析結果は予測を裏付けるものであったため、本研究の発見は意味的な知識の獲得についても UG が関与している可能性を高めたものと解釈できる。